慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | E・O・ライシャワー著『ヴェトナムを越えて』 |
| Sub Title | E. O. Reischauer, beyond Vietnam : The United States and Asia |
| Author | 松本, 三郎(Matsumoto, Saburo) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1968 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology ). Vol.41, No.6 (1968. 6) ,p.93- 103 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 紹介と批評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680615-0093 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 紹介と批評

## Edwin O. Reischauer, Beyond Vietnam: The United States and Asia. Alfred A. Knopf: New York, 1967, 242 pp.

## E・O・ライシャワー著『ヴェトナムを越えて』

### 一

ライシャワー教授については、今改めてここで説明する必要はなかろう。一九一〇年東京に生まれたかれは、その人生のかなりの部分を日本を中心とするアジアで過ごし、ハーバード大学教授として、また駐日大使として、一貫してアジア問題の研究と理解のために努力してきた。ニューヨーク・タイムズ紙におけるウォルター・リップマンの言葉を借りれば、「ロシア問題についてはジョージ・ケナン、アジア問題についてはエドウィン・ライシャワー、現在アメリカにおいてこの二人の右に出る者はいない」のである。一九六六年初秋駐日大使を辞任し、アカデミックの世界に戻ったかれは、そのきわめて多忙な生活の中で、昨一九六七年ここに紹介する最近著「ヴェトナムを越えて」を著わした。ライシャワー教授の著書には、このほかに、Japan Past and Present (1947), The United States and Japan (1950), Wanted:An Asian Policy (1955), East Asia: The Great Tradition (1960, with J.K. Fairbank), East Asia: The Modern Transformation (1965, with J.K. Fairbank and A.M. Craig) などがあるが、本書は、アメリカにとつて益々重要になりつつあるにもかかわらず、アメリカのアジアについての認識と政策の欠如はいぜんとして甚だしいことを指摘した"Wanted:An Asian Policy"と同様に、主として大衆の啓蒙を目的として書かれたものである。

本書は、第一章「ヴェトナムの教訓」、第二章「わがアジア問題」、第三章「新らしいアジア政策の形成」、および第四章「アジアにおけるアメリカの役割に備えて」の四つの章から成るが、第一、第二章は、ヴェトナム問題を含む現代アジアにおける諸問題の本質を究明、過去のアメリカのアジア政策に欠けたるものを指摘したものであり、第三、第四章において著者は、この過去の教訓の上にアメリカの新らしいアジア政策の誕生が必要なこと、またそのための諸条件に論及している。著者はヴェトナム問題に対する反省から筆をおこしているが、その論及するところはその書名の示すようにヴェトナム問題にとどまらない。アジアとそこに住む全人類の半ばを越す人民とアメリカの関係を反省し、アメリカ外交の正しい道を考察すること、それが本書を貫ぬく著者の目的といえよう。

## 二

ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、クリスチャン・サイエンス・モニターズといつたアメリカの大新聞に、ここ数年間ヴェトナムの地図、ヴェトナムの記事が掲載されなかつた日はないといわれる。黒人問題をアメリカの国内的恥部とすれば、ヴェトナム問題は、正しく今日のアメリカの国際的恥部である。ライシャワー教授が、本書の第一章を先ずこのヴェトナム問題の考察と反省についやしたのは当然である。

著者によれば、民族自決の原則は、独立以来アメリカの伝統的信念となつてきた。しかしながら、第二次大戦後のアメリカは、ヨーロッパ諸国の当面する政治的、経済的難問に目を奪われ、アジアには無関心であつたため、アジア諸国に激動するナショナリズムを理解する努力を怠つてきた。ヨーロッパ諸国の東アジアへの復帰に反対することが、アメリカの野心に対するかれらの疑惑を深めることとなり、ヨーロッパの反共体制にひびを生じる原因となるのではないかと恐れたからである。その結果アメリカのアジア政策は、勃興するアジアのナショナリズムを無視したものとなり、それがヴェトナムやインドネシアの例にみられるように、結果的にはフランスやオランダにも不幸な運命をもたらすこととなつた。

さて、一九四九年秋の中国における共産政権の出現、あるいは国際共産主義の一斉蜂起に脅威を感じたアメリカは、ヴェトナムで泥沼戦争に悩むフランスへの援助をはじめ、一九五四年までにはフランスの戦費の八〇％を負担するに至つていた。そして、ジュネーブ会議以後フランスに代つて南ヴェトナム政府の強い支持者となつたアメリカは、そのご益々介入の度合を深め、遂に今日の如き悲劇的ともいえる状態に突入した。

この二十年余のヴェトナムの歴史を回顧するとき、そこには幾つかの岐路と選択の余地があつたと著者は考える。第一の機会は、第二次大戦の直後に、アメリカが、ヨーロッパ植民勢力のアジアへの復帰に断乎反対していたならば訪れたであろう。第二の機会は、一九四九年以後フランスのヴェトナムにおける戦争努力に大きな援助を与えなかつたならば、第三の機会は、ジュネーブ協定を忠実に支持し、ゴ・ディン・ディエム政権への強い支持を行なわなかつたならば、そして最後には、一九六四年から六五年にかけての冬に、大規模な戦争介入への決定を行なわなかつたならば、それぞれ訪れていたかも知れない。しかしながら、不幸にもアメリカの四人の大統領は、以上四つの機会に常に逆の決定を下してきた。

第一の機会（アメリカにとつて、もつとも選択の可能性が強かつた機会）がもし選択されていた場合を仮定してみよう。明らかにホー・チ・ミンが、今日の北ヴェトナムと同種の共産党政権を全ヴェトナムに樹立し、二つに分裂した現状と比べれば遙かに安定した合理的社会をそこに確立していたであろう。その政治体制は、決してわれわれの承認しうるものではないが、この統一ヴェトナムは非常に民族国家としての色彩の濃いもので、現在の分裂したヴェトナムに比べれば、その隣邦あるいは国際平和に対する脅威が少なかつた

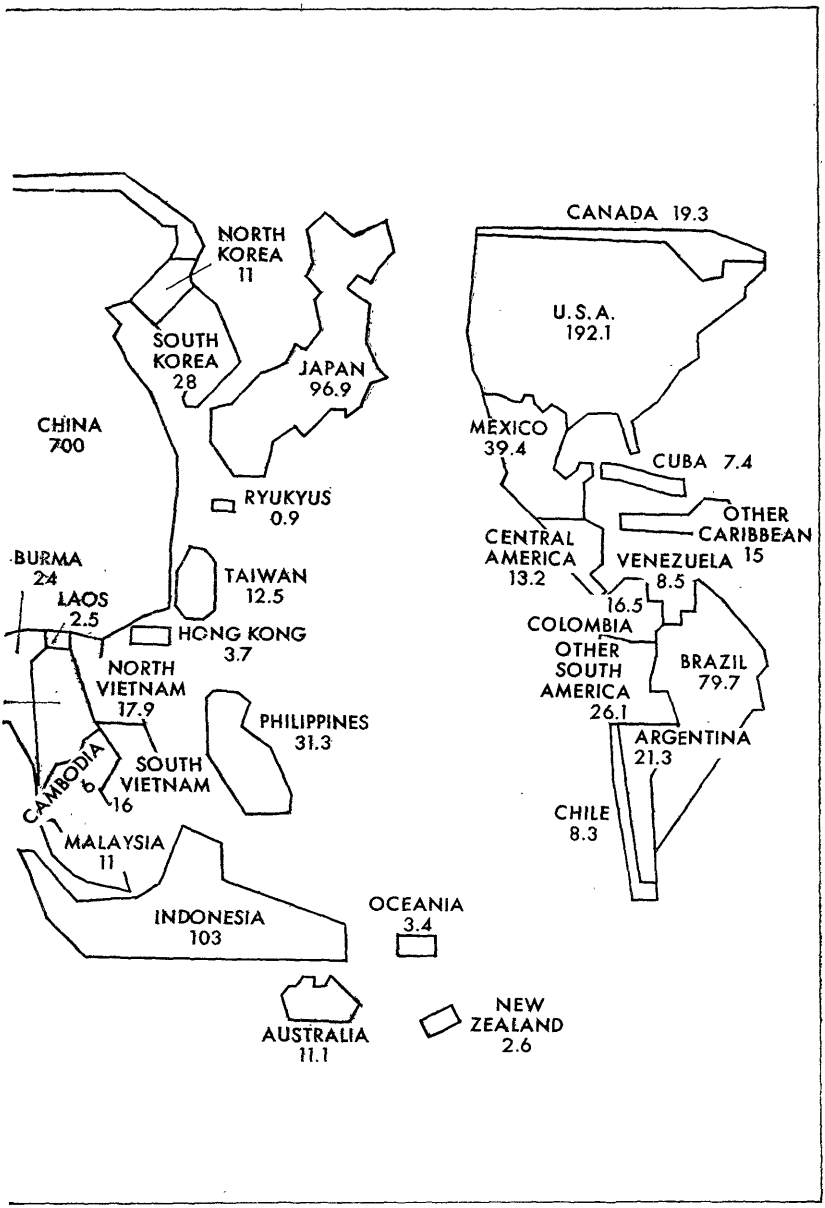
のみならず、その北隣の大国、中国に対する伝統的警戒心の強さから考えれば、ヴェトナムはむしろ中国勢力の南方への拡大を防ぐ防波堤とさえなつていたかも知れない。このような情勢が、少くとも今日のヴェトナム情勢よりは遙かに優れたものであつたことは論をまたない。

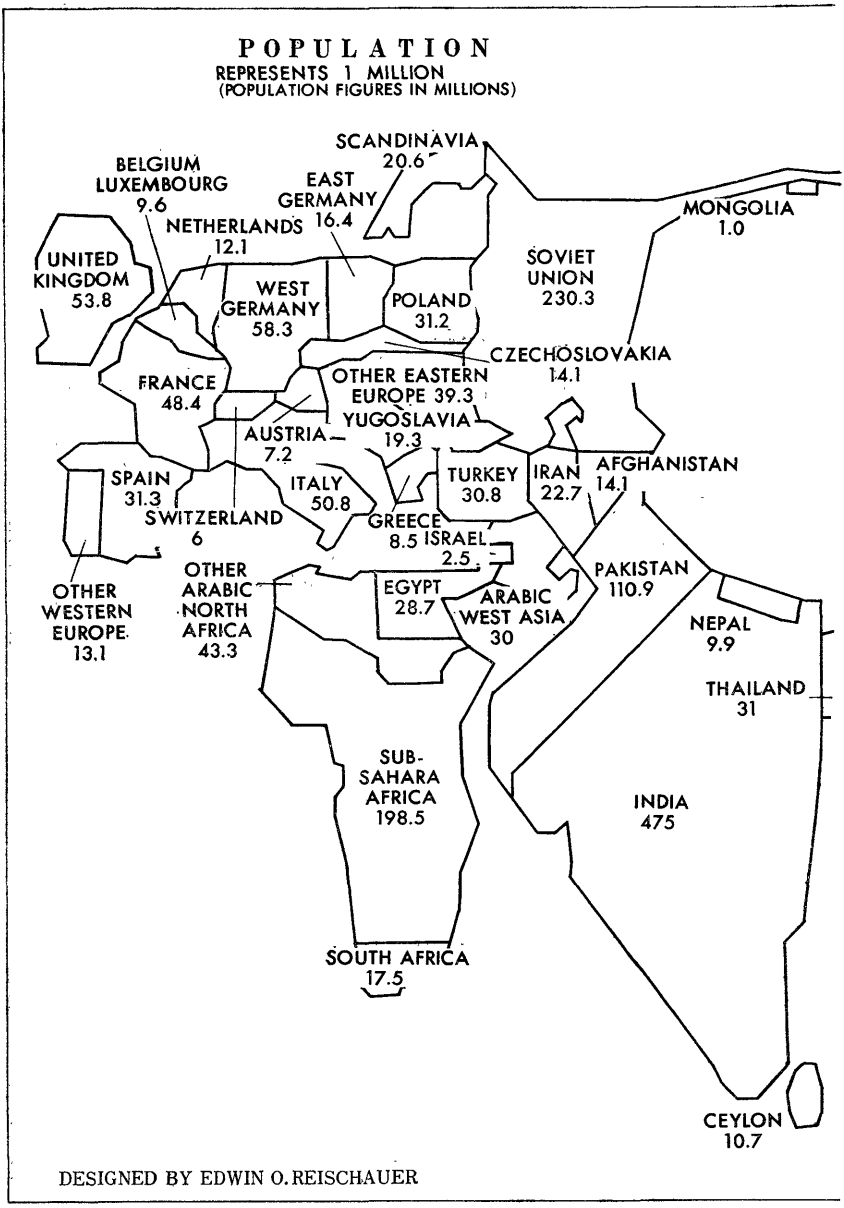
この第一の機会を逸して以後、アメリカにとつて選択の余地は次第に狭くなり、また問題をはらむようになつてきた。アメリカのゴ・ディン・ディエム政権への傾斜と南北ヴェトナムの統一に反対する方針の決定と並行して、ハノイの中国への傾斜とアメリカへの敵意は加速度的に強まつていつた。しかし、一九四九年、一九五四年、それに一九六四年の秋でさえ、われわれにはなお別の道を歩む機会があつたのである。

もしわれわれが、注意深く且つ歴史的にアジアの問題を観察しておれば、以上のような機会をうまく捕えることができたであろう。しかしながら、中国や朝鮮における苦い経験にもかかわらず、一度その薬が喉元を過ぎればわれわれは直ぐにその苦さを忘れ、問題の本質に深い反省のメスを加えることを怠つてきた。今日もヴェトナム問題の解決策について日夜論じられているが、ヴェトナムを越えて、われわれの対アジア関係の本質を理解しようとする真剣な努力は余りみられない。「アメリカには多数のアジア政策があるが、ただ一つの首尾一貫したアジア政策もない」(三八頁)のである。この基本的アジア政策の欠如が、アジアにおけるアメリカの失敗の主要原因である。何がアメリカのアジアにおける基本的利益であるかをまず決定し、それに基づく長期的アジア政策を樹立することが、今日われわれのもつども必要としていることである。

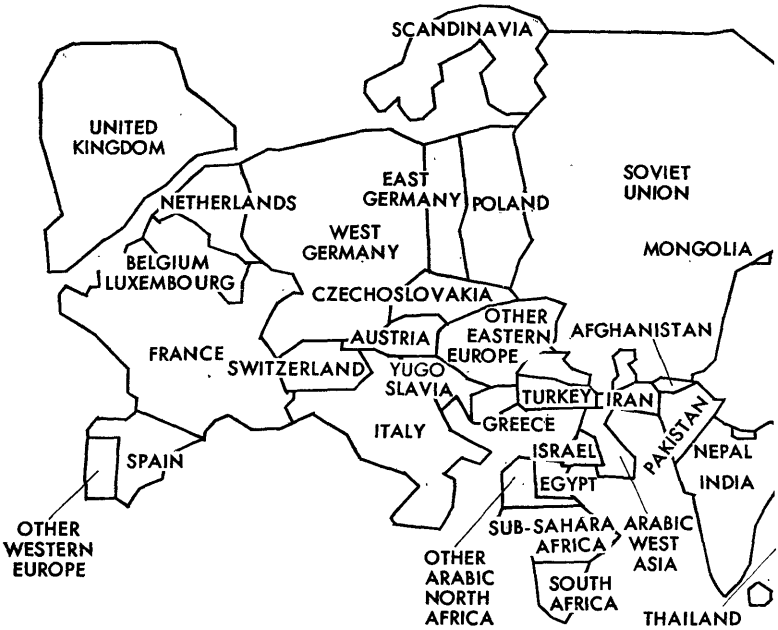
さてヴェトナムにおける戦いが益々エスカレートするとともに、ヴェトナム人、アメリカ人に与える人的、物的損失は増大の一途を辿つているし、ソ連、日本、西欧諸国等のアメリカに対する不信感も増大している。アメリカ国内では誰もが平和の到来を待ち望んでいるがその前途は必ずしも明かるくない。多くの人々が、交渉による解決の可能性に期待をつないでいるが、たとえ北爆が停止されようと、サイゴン政府の民主化に成功しようと、国際軍の介入によろうと、またいかにわれわれが熱心に交渉による解決に力を注いでも、結局一方が敗北に直面するような状態にくるまでは、現状では交渉による解決は成功しないであろう。

交渉による解決に成功の見込がない場合、残された道は次の三つである(九頁以下)。㈠軍事力の大拡大による戦争の急速な終結・この手段はゲリラ戦争を終らす可能性が少ない割には、危険性が極めて大きい、㈡南ヴェトナムに対する支持の撤回・これはヴェトコンの勝利、アメリカの敗北を意味する。支持撤回の理由をいかにカモフラージュしようと、アジアに対する心理的、政治的影響は大きく、アジアの不安定は反つて増大する、㈢原則的には現状を維持し、妥協の機会の訪れるのを待つ・北爆停止等できるだけ戦争の規模を小さくし、戦争終結の方向への努力を続けながらも、現在の政策には大きな変更を加えずに和平の機会を待つわけである。本書においてライシャワー教授は不満足ながら現状ではこの第三の道をと


NORTH KOREA 11
SOUTH KOREA 28
JAPAN 96.9
CHINA 700
RYUKYUS 0.9
BURMA 24
LAOS 2.5
TAIWAN 12.5
HONG KONG 3.7
NORTH VIETNAM 17.9
PHILIPPINES 31.3
CAMBODIA 6
SOUTH VIETNAM 16
MALAYSIA 11
INDONESIA 103
OCEANIA 3.4
AUSTRALIA 11.1
NEW ZEALAND 2.6
CANADA 19.3
U.S.A. 192.1
MEXICO 39.4
CUBA 7.4
OTHER CARIBBEAN 15
CENTRAL AMERICA 13.2
VENEZUELA 8.5
16.5
COLOMBIA
OTHER SOUTH AMERICA 26.1
BRAZIL 79.7
ARGENTINA 21.3
CHILE 8.3


POPULATION
REPRESENTS 1 MILLION
(POPULATION FIGURES IN MILLIONS)
SCANDINAVIA 20.6
BELGIUM LUXEMBOURG 9.6
EAST GERMANY 16.4
NETHERLANDS 12.1
MONGOLIA 1.0
UNITED KINGDOM 53.8
WEST GERMANY 58.3
POLAND 31.2
SOVIET UNION 230.3
CZECHOSLOVAKIA 14.1
FRANCE 48.4
OTHER EASTERN EUROPE 39.3
YUGOSLAVIA 19.3
AUSTRIA 7.2
SPAIN 31.3
ITALY 50.8
TURKEY 30.8
IRAN 22.7
AFGHANISTAN 14.1
SWITZERLAND 6
GREECE 8.5
ISRAEL 2.5
OTHER WESTERN EUROPE 13.1
OTHER ARABIC NORTH AFRICA 43.3
EGYPT 28.7
ARABIC WEST ASIA 30
PAKISTAN 110.9
NEPAL 9.9
THAILAND 31
SUB-SAHARA AFRICA 198.5
INDIA 475
SOUTH AFRICA 17.5
CEYLON 10.7
DESIGNED BY EDWIN O. REISCHAUER

CANADA
U.S.A.
NORTH KOREA
SOUTH KOREA
JAPAN
CHINA
RYUKYUS
BURMA
LAOS
TAIWAN
HONG KONG
NORTH VIETNAM
PHILIPPINES
SOUTH VIETNAM
CAMBODIA
MALAYSIA
INDONESIA
OCEANIA
AUSTRALIA
NEW ZEALAND
MEXICO
CUBA
OTHER CARIBBEAN
CENTRAL AMERICA
COLOMBIA
VENEZUELA
BRAZIL
OTHER SOUTH AMERICA
ARGENTINA
CHILE




DESIGNED BY EDWIN O. REISCHAUER

る以外にないと考えている。

第一章において著者は、アジアにおけるアメリカの失敗の主要原因が、基本的アジア政策の欠如にあることを指摘したが、第二章はこの「何がアメリカのアジアにおける基本的利益であるか」を吟味する。著者は先ず、人口と国民総生産の両面から作成した二枚の世界地図を提示し、世界全人口の半ば以上を保有するアジアが、国民総生産の上では極めて小さい部分を占めるに過ぎないことを指摘し、ここにアジア問題の本質があるとする。さてこのようなアジアにおけるアメリカの利益とは何であろうか。日本を除く東、南アジアから得るアメリカの経済的利益はきわめて小さい。その地域に対するアメリカの投資は、全体の三%以下であるし、貿易額も日本一国とのそれよりも遙かに低い。また安全保障上の見地から見ても、アメリカの軍事力を考慮するときアジアのこの部分からアメリカに直接且つ重大な脅威が及ぶとは考えられない。

ではアメリカのアジアにおける利益とは何であろうか。それは第一には、世界平和の一環としてのアジアの平和と安定にある。富と人口のアンバランスは、アジアを世界でもつとも不安定な地域としており、不安定なアジアは世界の平和、ひいてはアメリカの平和と安全に重大な影響を及ぼすからである。第二には、アジアの将来に対する期待である。現在はたとえ貧しくとも、アジアの安定と発展は、やがて世界の繁栄に還元されるであろう。第三には、援助を必要とするものを助けねばならないという道徳的要求である。このように、われわれのアジア政策は、アジアの平和、安定そして発展



が、世界の平和と繁栄に密接な関連をもつという長期的展望のもとに立案されねばならない。

次にわれわれがしばしば誤解してきたのは、アジアにおいてナショナリズムの果す役割についてである。ヴェトミン運動は、共産主義者の指導の下に行なわれたものとはいえ、その主要な力は、強力且つ近代化された独立国家をというヴェトナム・ナショナリズムの情熱に支えられていた。中国共産党を支持したのも同じこのナショナリズムの情熱であつた。外国の支配から解放され、自からの手で強力且つ繁栄する国家を建設しようというナショナリズムこそは、アジアを推進する強大な海流であつた。アジアで共産主義が比較的人気があるのは、それが民族自決をかちとるもつとも確実でもつとも早い方法であると考えたからである。かくて、アジアではナショナリズムが歴史のもつとも基本的な推進力となり、それを達成すべき技術の一つとして、時に共産主義が採用される。共産主義がナショナリズムを利用したと人はいうけれども、より適切な表現は、アジアにおける共産主義はナショナリズムを達成する手段の一つに過ぎぬということである（六四頁）。

ヴェトナムの悲劇は、われわれがこのような事実を見誤つたことに始まる。ヨーロッパにおける反共政策の成功がアジアでも成功すると信じ、フランスのインドシナにおける失敗の教訓は全く学ばれなかつたのである。今日ヴェトナム戦争はわれわれに多くの教訓を与えている。それは、ゲリラ戦争におけるアメリカの軍事力の限界を示したのみならず、アメリカ軍の存在はわれわれの敵を真の民族

主義者の地位に押し上げ、軍事的破壊はわれわれの経済的、社会的発展のための努力を無に帰せしめ、国際的にも反アメリカの感情を増大せしめた。アジアの民族主義に対する深い洞察こそ今日われわれのもつとも必要とするものの一つである。

第三章「新らしいアジア政策の形成」は、日本、中国、その他のアジアの三部に分かれる。日本については、その過去の失敗の経験、国内政治の分裂、近隣諸国の警戒等が、日本の世界における役割の探求を消極的ならしめているが、自信を回復してきた日本が、次の五乃至十年間にもつと積極的姿勢をとるであろうことは明らかで、この今後の日本の進路如何が、アジアの近い将来にとつては中国のそれより更に重要な意味をもつことになろう。その際日本の注意すべきは、アジアの指導権(リーダーシップ)をとることを決して意識してはならないということである。もしそうすれば、われわれが「醜い(アグリー)アメリカ人」と呼ばれたように「醜い日本人」という言葉が聞かれるようになるであろうからである。アジアにおける日本の進出が将来軍事的のものとなる可能性は少ないように思われる。世界的に比較的安定した軍事上の均衡が続いている現状で、日本が軍備を拡大する必要はないのみならず、それは近隣諸国に脅威を与え、莫大な無駄な費用を要求することになり日本にとつて賢明な道ではない(一一五頁)。日本のアジアにおける使命は、経済的、技術的援助の輸出者となることにあり、それがアジアの経済的発展と安定に貢献し、ひいてはアメリカの利益とも合致することに留意すべきである。

著者の中国に対する基本的認識は、「アメリカの中には、その国内の情勢によつては、中国の指導者が対外的冒険に乗出すかも知れないと恐れている人も多いが、実際にはその可能性は少ない。しかし、例えば反乱を教唆したり、援助したりすることは今後も続けるであろう」(一五九―一六〇頁)という点にあり、従つて、中国の指導者達が、革命を世界中に拡める必要があると主張している間は、現在の封じ込め政策を続けるのが賢明であると考える。しかし同時に、中国の硬直した態度をできるだけ和らげるために、中国の国連加盟を承認したり、中国との貿易を促進したりする必要を著者は認め、現在アメリカの中国研究者の中で支配的ないわゆる「孤立化させぬ封じ込め政策」を支持している。

さて著者によれば日本、中国を除くアジアには、統一の問題、人口の問題等多くの難問が横たわつているが、長期的にみればアジアの将来は決して暗くない。第二次大戦後この地域に投入されたアメリカの人的物的資源は大部分、アジアの安全と防衛という短期的目的のため費されてきたが、国境を越えた外的侵略に対する防衛の問題は、現在のアジアではさして深刻でなくなつている。アジアの大部分の国の統一と安定に対する主要な脅威は、専らその国内条件に根ざしているのが現状で、これに対してわれわれの軍事力は比較的無力であるばかりか、しばしば政治的、経済的に逆効果を示してきた。このような点を指摘したのち、著者はアメリカのアジア政策の鉄則として次のような諸点を挙げる(一八八頁以下)。㈠国内の敵から自らを防ぐ力のない政権は、たとえわれわれが援助してもその敵から守つてやることはできないし、またその価値もない、㈡現在の

アジアの不安定は、依然としてアメリカがアジアにおいて必要な防衛の役割を担うことを不可避にしているが、不必要且つ危険な内戦への軍事介入に捲込まれるのを避けるため、その防衛は第七艦隊を中心とした軍事力に頼り、後進国におけるアメリカ軍の存在はできるだけ減じていく、㈢後進国の多くでは、その民族運動の経緯からして、同盟よりは中立の方がその国家的安定のためより優れている場合が多く、その中立はまたわれわれにとつても有利である、㈣長期的なアジアの発展という視野から眺めれば、その経済的、制度的発展の方が軍事的防衛よりも遙かに重要であること、またわれわれの援助に当つて、いわゆる「ひもつき援助」とか指導者意識とかを断固排除することが必要である。

最後にライシャワー教授は、再び目をヴェトナム問題に向ける。第一章においてかれは、現状においては北爆停止等により戦線を縮小しながらも原則的には現在の政策を維持しつつ平和の機会を待つ以外に方法がないことを指摘したが、ここでは更に一歩突つ込んで、交渉による解決の条件を吟味する。アメリカ軍の全面的撤退は当然のこととして、ヴェトコンの投票参加、連立政権参加等が問題の実質的解決にはつながらないであろうこと、結局は、実効支配地域に従つての南ヴェトナムの再分割か、段階的な南北統一の提案以外に解決の道はないのではないかというのが著者の結論である。ヴェトナム人の大多数と共産党指導者の間に存在する考えの相違に問題解決の鍵があると著者はみる。要するにライシャワー教授のヴェトナム戦争解決に対する基本的態度は、日本、中国を除くアジアの中で、人口、生産等の点で僅か二%を占めるに過ぎない南ヴェトナムの地位を考えれば、現在のアメリカのヴェトナム問題への専心介入は得るところ余りに少なく失うものは余りにも多い。従つて、「南ヴェトナムに与えたわれわれの約束（南ヴェトナム人に民族自決の機会を与え、南ヴェトナムを軍事力による支配から防衛する）に反しない限り、且つ中国のヴェトナム支配という事態さえ避けうるならば、他のどのような解決方法であろうとわれわれは受け入れる用意がなければならない」（二〇八頁）というにある。

第四章は、アメリカのアジア政策の計画、立案を行うに際しての制度、機能上の諸欠陥および、アジア問題に対する官民双方の知識と理解の不充分さを指摘し、その改善策を提案しており、われわれ日本人にとつても反省させられる点が多いが、ここでは省略する。

## 三

本書を丁度読み終えた時（四月一日）、「北爆停止、次期大統領に立候補せず」というジョンソン大統領のショッキングなニュースを聞いた。これによりヴェトナム和平交渉への道が開かれたようであるが、なお解決への前途はきわめて厳しいものと思わねばならない。ライシャワー教授の指摘したように、たとえ交渉は開かれたとしても、双方を満足さす解決策を見出すことは非常に困難であるからである。しかしながら、テト攻勢以来のアメリカの実質的敗北、ドル危機、国内の不安と不統一といった諸要因は、著者が本書で考えた以上に、ヴェトナム戦争に対する疑念をアメリカ国民の中に急

速に醸成しつつある。今や、アメリカの望みうる最善の解決策は、当初の目標（共産主義者に民族解放戦争は割が合わないことを認識させること）には程遠い妥協による平和、それも終局的には共産側の支配の可能性がきわめて大きい和平しかないことが明らかになりつつあるといえよう。かくして今後なお迂余曲折はあろうけれども、結局のところアメリカは、できるだけ面子を失わない形でヴェトナムから撤退せざるをえなくなるであろう。ヴェトナム問題は、現実主義的ハト派の著者が予測したレールの上を、しかしかれの時刻表より遙かに速い速度で走りつつあるといえるのかも知れない。

アメリカのアジア政策が、アジアのナショナリズムに対する深い理解の上に立てられねばならないとするライシャワー教授の主張は、ナショナリズムこそアジア現代史を推進するもつとも基本的な底流であるとみるかれの歴史観に出たものである。変転きわまりないアジア問題を理解するためにしばしば試みられてきた近視眼的アプローチを避け、それを歴史の流れのうちに捕えようとする著者の立場は、現在アメリカ国民にもつとも欠けたるものの一つである。かくして、アメリカのアジア政策は、このアジアのナショナリズムとアメリカの国家的利益を両立させるべく確立されねばならないというのが著者の基本的立場となる。本土基地並の条件での沖縄の日本への返還論、あるいは台湾人の自決による台湾の国際的地位の決定等に展開される著者の考えは、明らかに以上のような教授の立場を示すものである。

先進強大国としてただひとり第二次大戦をほとんど無傷で切抜けたアメリカは、世界中の重大な責任を独りで背負いこみ、独りで解決しようとしてきた。アジアに起る諸問題に対しても、「アメリカの考えで、アメリカのために、アメリカの力による平和」をといつた立場から問題に接近していつたのであつて、アメリカは余りにも自分の力を過大評価し、アジア自身の立場を理解する努力を怠つてきた。中国、朝鮮における苦い経験に学ばなかつたアメリカ国民は、再びヴェトナム戦争という泥沼に落込み苦しんでいる。「このヴェトナムの教訓を忘れてはならない。そして、ヴェトナムを越えてアジア問題の本質に目を向ける必要がある」ことを説くライシャワー教授の熱弁に応えるかのごとく、アメリカの国内には、アジア政策の転換を求める一大要求が高まりつつある。悩める大国アメリカは、今や内政、外交両面において、重大なる転換期にさしかかつているようである。アメリカがこの難局をいかに乗り切るかは、それが直ちに世界的反響をもたらすものだけに、われわれにとつても決して他人事ではないのである。

（松本　三郎）